



TITLE:

<大會抄録>清末の經世思想と經世學

AUTHOR(S):

大谷, 敏夫

CITATION:

大谷, 敏夫. <大會抄録>清末の經世思想と經世學. 東洋史研究 1989, 48(3): 601-602

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154279>

RIGHT:

介したカシュガル・ハーン、ヨルバルスの一六六二年の敕令——軍事行動などを評價して配下のベクにベシケリム地方の土地と水利權を恩賜することを告示したもの——を、オアシス社會のあり方という觀點から光を當ててみるのが可能となる。これにより、清朝支配期に先行するカシュガル・ハーン國、ホージャ政權時代を含め、ウイグル民族社會が形成されて來たという十六——十九世紀のカシュガリアのオアシス社會の社會構造上の基本的性格を一層ふみこんで理解することができる。

十五・六世紀南インドにおける職人層の

擡頭について

辛島 昇

ヴィジャナガル期（一三三六—一六四九）のタミル語刻文を讀んでいると、その時代のインド半島東南岸のタミル地方で、手工業が發展した様子を見て取ることができる。そのことは、手工業に關係する税目の検討からもういえるが、この報告では、織布工であるカイコラと鍛冶工であるカンマラの權利について記す、それぞれ五つの刻文（十五・六世紀）を取り上げて、論じることにする。

初めの五刻文は、タミル地方中部のカイコラ達が、特別の機會に與に乗り法螺貝を吹く權利を地方領主によって認められたこと、後の五刻文は、同地方のカンマラ達が、地主層によって課されていた三つの特別税を免除されたことを記している。兩者の場合と

も、それらの權利は、先ずタミル地方北部で認められ、それが中部にまでおし廣げられたことが分る。

ヴィジャナガル期の多くのタミル語刻文からは、王に忠節を誓う地方領主が、職人達を寺領に住みつかせて庇護を與えた様子をも見て取れるが、ここで検討する十刻文は、十五・六世紀における職人層の擡頭が、ヴィジャナガル王國のタミル地方支配の進展と密接に關連していることをよく示している。それはまた、當然のことながら、當時の商業、とくに外國貿易の發展とも深く關連するものである。

清末の經世思想と經世學

大谷 敏夫

清末の經世思想研究は、賀長齡に代つて魏源が編纂した「皇朝經世文編」をもつて始まる。「經世文編」編纂は、この賀氏の「經世文編」をモデルとして清末まで繼續して行なわれた。ここに經世思想研究は、經世學という一つの學術分野を形成することになる。魏源はその著の中で、「學篇」「治篇」という項目を設けたが、經世學を治學として重視したところにその意義がある。魏源は、「公羊學」をその思想的根據としたが、この「公羊學」のもつ變革理論は魏源以後の公羊學者に受けつがれ、最終的に康有爲の學術に繼承された。しかしこの流れとは相互に關連しつつ體制教學であつた朱子學に經世的概念を加味したものもあらわれる。それは曾國藩によつ

て始められた「義理經世學」である。曾國藩は桐城派の文人の主張する義理・辭章・考據に經濟を加えることによって空理空論化した宋學を實踐的教學に轉化しようとしたのである。この曾國藩の經世學は、その後張之洞の思想にも繼承されていく。ところで曾國藩の經世思想は、魏源の實用思想に負うところが多く、また曾國藩の尊敬した陶澍・林則徐等の經世官僚は、いずれも魏源を幕友としたことでもわかるように清末の經世學及び經世學者は相互に深いつながりがあった。清末の經世思想及び經世學を研究することは、清末の政治思想及び政策及び政治過程を明らかにする一つの鍵であると思われる。

清代の北新關と杭州

香坂昌紀

明清時代、大運河や長江等の主要交通路の要衝には、鈔關・常關が設置され、流通過程にある船隻・物貨を對象とする徵課を行っていた。清代にあつては、關稅收入は鹽課と共に戶部の重要財源をなしていたが、より重要なのは、國家の關稅收入をはるかに上まわる收奪時人の認識ではその十倍前後という \parallel が流通過程から吸い上げられていたことである。かかる巨額の收奪は、當時の商品流通に、ひいては當時の經濟とその展開に對し、深刻且つ重大な影響を與えたと考えられる。

この問題を追求するためには、差異の顯著な各關の個別的研究を

進め、諸關相互の關連を考察し、廣狹域にわたる商品流通の實態を解明し、これとの關連において關制を理解することが必要である。筆者はその試みとして、蘇州滄墅關と淮安關につき若干考察したところがあるが、今回は大運河最南端、杭州北郊の北新關を取り上げ、杭州の地が江蘇南部・安徽東部・江西東部・福建・廣東の諸地方と水陸兩路により直接間接に連なり、これらの地と大運河を結びつけるターミナルの役割を果していたこと、及び著名な杭州の絹業が省城と周邊地域に展開していたことにより、省城を中心とする日常的な狹域の流通圈が成立していたこと、北新關は大關の他に六關七務十門八口址といわれる據點を有し、廣狹兩域にわたる商品流通を把握し、そこから年額十五萬兩程の正額贏餘を確保していたこと、これに對抗して商民が種々の對策を講じていたことなどについて考察したい。

宋代の戸と口

梅原郁

周知のように、宋代三百年の戸口統計は一對二と、他の時代と甚だ違ふ比率を残す。わが國では、それについて、男女全戸口記載を原則としながら、漏口その他の原因でこうした結果を招くという説と、男口のみ數値という説が對立した形になっている。また、中國においても根強い男女全口説が存する。

今回の報告において、私は從來觸れられなかった二、三の史料を